第30回経済学会賞（本行賞）審査講評

優秀作　及川雅斗

優秀作に選ばれた及川雅斗氏の「ヘクシャー＝オリーン・モデルの実証分析――ヘクシャー＝オリーン・モデルの理論とデータの適合度に関する分析――」は，国際貿易の伝統的理論であるヘクシャー＝オリーンモデルの仮定を緩和することによって，どの程度現実的な貿易データを説明できるかを考察した論文である．ヘクシャー＝オリーン・モデルは，各国の生産要素賦存量の相対的な違いに応じて貿易パターンを説明する理論であるが，技術水準や消費者の嗜好が各国共通であるなど，現実的でない仮定が前提となっている．本論文では，先行研究に従いながら，ヘクシャー＝オリーンの基本モデルと，技術水準の異質性を認めるモデル，さらに二国間の距離を考慮したより現実的な需要関数を含むモデルの３つの定式化の比較を行っている．OECD 加盟 24 カ国のデータを用いることにより，計測された貿易の方向（輸出なのか輸入なのか）と，理論的な予想が一致するかどうかを分析し，他の定式化に比べ，技術水準と需要関数についての現実的な仮定を導入したヘクシャー＝オリーンモデルは現実の貿易データをうまく説明することを見いだしている．既存研究に依拠しながらも，高度な分析手法を用いて，自らの手による結論の再構成と結果の適切な解釈を行っており，理論と実証が融合した非常に質の高い研究である．卒業研究として高い評価を与えることができる．

優秀作　グエン　ティ　ゴック　アイン，他６名

優秀作に選ばれたグエン　ティ　ゴック　アインさん他６名による「円高と輸出入物価の変動――日本の輸出入と為替レートのパススルー――」は，リーマンショック後の円高局面を 1990 年代前半の円高局面と比較しながら，円高が日本の輸出と輸入に与える影響について，為替レートのパススルー（いわゆる為替転嫁率）に関する実証分析によって明らかにした論文である．日本の輸出入を為替レートのパススルーの観点から分析した研究は数多く存在する．しかし，リーマンショック以降の円高局面について行われた研究はまだ少ない．それに対して，本論文は，リーマンショック後の今日的トピックに迫るために，為替レートのパススルー分析の先行研究を詳しく検討し，関連統計指標とその利用方法を周到に検討した上で，日本の輸出入における主要産業それぞれについて貿易構造の変化を網羅的に検証している．その結果，産業分野毎の状況の違いに注目しつつ，日本の貿易構造の変化の全体像を多面的に捉えている．日本の輸出入産業が激しい競争時代に入ったことがデータ的に裏付けられている．このような今日的課題に高度で緻密な分析手法と説得力あるデータ利用によって迫る力作として，高い評価を与えることができる．また，このような多面的な研究の背景にゼミナリステン相互の活発な議論が感じられ，共同研究の労作としても評価することができる．今後の研究の展開をさらに期待している．

佳作　一藤龍太郎

佳作に選ばれた一藤龍太郎氏の「日本製造業の海外進出立地要因分析――進出先国及び企業の財務情報に基づく二点からの分析――」は，日本の製造業がどのような要因に基づいて海外直接投資を行っているかを，投資先国の要因と企業内部の要因の二点から分析している．分析対象は 2000 年から 2009 年にかけて世界 62 カ国へ海外進出した上場企業のパネルデータである．企業の立地選択は，投資先国の市場規模，賃金水準，国の安全度，為替変動や，企業側の要因として，企業規模，研究開発能力，利益率，流動比率，自己資本比率，労働生産性に依存すると仮定する．コンディショナル・ロジットモデルを用いた推定の結果，国の安全度に関わる推定式の係数は小さく，リスクに関わらず積極的に海外進出する企業の傾向を見いだして

いる．さらに，立地選択において，企業内部の要因の改善が，投資先国のリスク要因をどの程度打ち消すことができるのかという点の分析も行っており，大変興味深い．企業側の要因として，どのような財務情報を選択するかについての考察がやや不足しているように見受けられるが，オリジナリティーの高い研究である．

佳作　渡邉俊

佳作に選ばれた渡邉俊氏の「東アジアの経済統合の現状と展望――EU の事例を踏まえて――」は，比較制度分析の方法によって，東アジアの地域統が抱える課題を，EU との比較という観点から検討している．本論文は，東アジアの金融協力，通商協力，通貨協力を検討することによって，東アジアが構造的なドル依存体制から脱却するという課題と，他の地域と比べて大きな域内経済格差を克服するという課題，という 2 つの大きな課題を抱えていることを明らかにした．その課題克服についても若者らしい野心的な展望を示唆している．本論文は政治経済学に立脚した総合的な比較分析によって，東アジアの経済統合が抱える基本問題を大きな枠組みとして捉えた研究であり，意義ある研究といえる．EU との比較に関して分析が十分でない点が残っているが，問題の大枠を捉える政治経済学的な研究の特長が十分に活かされた意義ある研究として高く評価された．

佳作　大里尚央

佳作に選ばれた大里尚央氏の「男女給与格差が女性の未婚率に与える影響」は，男女の給与格差が大きいほど女性の結婚に対する誘因が強くなるという理論を，国勢調査のパネルデータを用いて実証的に検討している．非説明変数として，特定の年齢層の女性に占める未婚女性の割合（未婚率）を使用し，説明変数には，男女の給与格差の変数，非労働所得の代理変数，未婚女性一人あたりの未婚男性数など使用している．OLS 推定の結果，理論モデルとは異なり，男女の給与格差が女性の未婚率に与える影響は有意ではないことが示された．一方で，未婚女性一人あたりの未婚男性数の減少は，女性の未婚率を有意に上昇させることが示されている．説明変数の選定や利用可能なデータついて詳細な説明がなされており，きちんとした実証的手続きに基づいた着実な研究として評価できる．相関関係のみの分析で因果関係が不明な点など，分析が十分でない点は残っているが，少子高齢化という重要なテーマとも関わる意義のある研究である．

第 30 回本行賞審査委員会
審査委員長　岡部純一
審査委員　　伊集守直，上川孝夫，武岡則男，西出勝正，椛島洋美